

中学校における配慮の必要な生徒への支援と支えあう仲間づくり

高度学校教育実践専攻教職実践高度化系

生徒指導コース

生徒指導・学級経営分野

氏名 仲島 直子

実習責任教員 阿形 恒秀

実習指導教員 小坂 浩嗣

キーワード：不登校生徒、生徒理解、仲間づくり、構成的グループエンカウンター

第1章 課題設定の理由

第1節 大学院入学までの筆者の思い

これまでの生徒への関わりを振り返った時、筆者にはmust（ねばならない・べき）にとらわれた力みがあり、一方的な教師主導の指導に陥っていたように感じた。そこで、今一度、生徒との関係性について考えること、生徒への関わりを通じて自分自身の在り方を振り返ることが必要であると強く感じた。そして、生徒たちの持つ力を引き出し、伸ばしていくために、教師として何ができるのだろうかという問題に関心が高まっていった。

第2節 テーマ設定の背景

文部科学省（2012）は、通常の学級に在籍する児童生徒のうち、知的発達に遅れはないものの学習面又は行動面で著しい困難を示す児童生徒の割合が推定値で6.5%であるという調査結果を報告している。また、実習校における聞き取り調査からも、多くの教師が、通常学級において配慮の必要な生徒が存在していると感じており、そのような生徒についての詳細な状況把握や、より丁寧な支援が必要であると感じていることがわかった。

また、文部科学省（2010）は、児童生徒理解の基本について、生徒理解を多角的・多面的に行うことは生徒指導において重要なポイントであると示している。実習校において不登校生徒

の存在が多いが、不登校の背景にある状況把握や丁寧な支援を組織的に展開することが大切であると多くの教師が考えていることもわかった。一方で、支援や理解の必要性は、不登校生徒に限らず、学校に登校している生徒においても言えることである。そのため、生徒の悩みや困り感を解消する上では、教師側からの支援に加え、生徒間で支え合う関係も必要であると考え、「配慮の必要な生徒への支援」と「支えあう仲間づくり」を実践研究のテーマとした。

第3節 実習校の実態

実習校は、徳島県中央北部に位置し、阿蘇山脈を背に、南に吉野川を望む、水と緑に恵まれた自然豊かなまちにある。2つの小学校校区をもち、生徒数175名、学級数11学級（特別支援学級4学級を含む）、教職員24名の小規模の中学校である。生徒の実態としては、各学年に不登校生徒が数名おり、主に学級担任が家庭訪問や日々の電話連絡などを持つことに努めている。特に今年度の新入生は、小学生の時から不登校気味の生徒が3名、特別支援学級に在籍していた生徒が12名と多く、個別に支援が必要な状況があった。

第2章 実践研究の方法

第1節 研究の目的

実習校の現状を踏まえて、本実践研究では、「配慮の必要な生徒への支援」に取り組み、特

に不登校生徒への支援に関する省察力の向上と実践知の深化をめざした。また、「支えあう仲間づくり」に取り組み、生徒にとって学校・学級が居心地のよい場と感じられるような関係づくりに関する構想力の向上と実践知の深化をめざした。

第2節 研究の計画

「配慮の必要な生徒への支援」について、筆者は、コミュニケーションが苦手な不登校生徒Aと一定の関係を築けていたので、筆者が大学院に入学したx-1年の12月より、実習校の許可を得て、定期的にAの家庭を訪問することにした。そして、家庭訪問を通じて、Aについての理解を深めるとともに、保護者との連携を図り、Aに対する学校としての支援の充実に協力することになった。また、特別支援学級の担任として3年間Aに関わった教員等とも情報共有を図りながら、学校として組織的にAの支援に取り組むことをめざした。

このようなAとの関わりを通じて、筆者は、Aの今後の生活や進路について共に考えていくとともに、配慮の必要な生徒への支援に関する筆者自身の姿勢を省察したいと考えた。

また「支えあう仲間づくり」について、中学1年生の生徒（1組30名・2組29名）を対象に、構成的グループエンカウンターを参考にしながらグループワークを行うことにした。中学入学後の4月、5月には、個々の生徒のサポートに取り組みながら、生徒の実態とクラスの状況把握に努め、1学期末の6月と、2学期の9月と10月に、支え合う仲間づくりを目的としたグループワークを実施することにした。

第3節 研究の方法

「配慮の必要な生徒への支援」にあたっては、筆者とAとの関係性を読み解くために、臨床心

理学者の角田豊が提唱する「プロセスレコード」を活用した。プロセスレコードとは、アメリカの看護教育、その中でも精神科看護の領域において考案され発展してきた看護師のための省察法である。

また「支えあう仲間づくり」の実践研究にあたっては、國分康孝・國分久子による「構成的グループエンカウンター（Structured Group Encounter、SGE）」を参考にグループワークを実践することとした。

第3章 実践の実際

第1節 配慮の必要な生徒への支援

不登校生徒Aに対しては、x-1年12月からx年10月にかけて定期的に家庭訪問を行い、訪問後はプロセスレコードの様式を活用して記録と考察を行い、Aについての理解と支援に努めた。

第2節 支えあう仲間づくり

①グループワーク「教室はどこだ?!」

6月24日の授業で、「教室はどこだ?!」（原口、1999）を行った。これは、5・6名で構成されたグループのメンバーで協力して、課題を解決する活動である。活動を終えて、生徒の振り返りシートから明らかになった生徒の気づきは、以下の6点に集約される。

- ・自分が役に立つことを経験する嬉しさ
- ・仲間がリードしてくれる、頑張ってくれることの喜び
- ・コミュニケーション（情報伝達・情報共有）の難しさ
- ・話し合いを深めていく際の協力の大切さ
- ・活動を共有する機会の大切さ
- ・協働作用が生み出す力の大きさ

また、課題として、次の2点が考えられる。

- ・生徒一人一人を大切にしながらグループワーク

の仕組み

- ・教師の立ち位置について

②グループワーク「友達から見た私」

9月30日の授業では、エクササイズ「気になる自画像」(酒井、1996)を参考にしたグループワーク「友達から見た私」を実施した。これは、生徒本人が思う自分自身の印象を表わす言葉と他者からの印象を表わす言葉を比べることで、自己を見つめるというグループワークである。活動を終えて、振り返りシートから生徒たちは、次の3点の気づきを得ていた。

- ・新たな自分への気づき
- ・友達と通じ合う喜び
- ・他者に目を向ける意識

③グループワーク「協力ゲーム」

10月30日の授業では、「言葉を使わないコミュニケーション」をテーマに、グループワーク「協力ゲーム」(津村・星野、1996)を実施した。4・5名で構成されたグループで、一人一人に配布された紙片を友達と無言でやりとりし、最終的に全員が同じ形・同じ大きさの図形を作成するというエクササイズである。今回の活動の振り返りシートから、生徒たちは次の4つの気づきを得ていたことが読み取れた。

- ・言葉のありがたさ
- ・よく見ることの大切さ
- ・協力することの大切さ
- ・人それぞれの受け取り方があること

また、課題として、次の2点が考えられた。

- ・導入からグループワークへの接続の検討
- ・教師の傾聴と受容

第4章 実践研究の成果と課題

第1節 配慮の必要な生徒への支援

不登校生徒Aとの関わりについて、「Aにとっての意味」と「筆者にとっての意味」に分け

て、その成果と課題を述べる。

まず、Aにとっての筆者との関わりの意味について考察すると、成果は「登校の試み」と「一定の自己主張」の2点である。そして、Aが登校を試みた要因としては、「見守りつつ学校とつなぐ筆者の存在」と「自立心の芽生え」の2点が影響しているのではないかと考えた。また、プロセスレコードの記録からAの言動を振り返ると、Aが筆者に対して「一定の自己主張」をできる関係にあったことに気づいた。

課題は「中学校卒業後の進路の見通しを立てられなかったこと」であった。ただし、ゼミでは、不登校は解消できず中学卒業後の進路も本人の志望はなかなか固まらなかったけれども、そんな状況の中で筆者が寄り添ったことが今後、Aのキャリア形成に何らかの意味をもってくるかもしれないとの助言を受けた。

次に、筆者にとってのAとの関わりの意味を考察すると、「生徒との心理的距離感」と「教員との連携」という点で、成果と課題の両面があった。これまでの筆者は、どの生徒とも心理的距離感を近くもとうとする傾向にあった。そのため、生徒から親しまれる一方で、「なれあいの関係」になっているのではないかと感じることもあった。教師の役割には、生徒に知識や技能および社会性を身につけさせる「指導的な関わり」と、一人一人の自己の確立や人間関係の育成を支える「援助的な関わり」がある。先に「なれあいの関係」と書いたように、筆者はこれまで必要な「指導的な関わり」を欠いた場面もあった。また、Aとの関係性においては、本人の自立・主体性を大切に「援助的な関わり」が不十分で過度に介入しすぎたように思う。今後は、生徒の実態や状況に合わせてバランスよく使い分けられる教師を目指したい。

河合（1970）は、「可能性への信頼とは、待つ才能といってもいいかもしれません。あるいは、もっと言ったら、結局、何もしないことだと言っていいと思います。『何かするのはむずかしいけれども、何もしなくていいのなら誰でもできる』と思うのですが、じつは、ものすごく仕事をしているのです。」と全力で待つことの大切さを述べている。筆者は、Aへの関わりについて振り返った時、「何もせずに全力で待つ」という意識が欠けていたと感じる。Aにとって最低限必要な情報は提供するが、指示・促し・励まし、ケーキやコミックなどの「差し入れ」をするのではなく、可能性を信じつつほどよい距離を保って関わることの難しさと重要性を学んだ。

「教員との連携」については、家庭訪問を中心としたAとの個別の関わりの中で、実習校の特別支援学級担任とは常に情報共有し、Aが登校した際には、連携をとって関わり、支援することができたことが成果である。その一方で、不登校生徒に対する組織的な対応方針の確立・共有という点で、考えていたような役割を果たせなかったことが今後の課題である。

第2節 支えあう仲間づくり

1年生における支えあう仲間づくりの成果は「生徒間の交流が促進された」とことと「体験を通じて生徒が人間関係の重要性を実感した」とことの2点である。

中学校入学当初、生徒たちは、新型コロナウイルス感染防止のための「学習活動形態の制限」や「学校行事の延期」など様々な制約もあり、同じ教室の中にも、深く交流することが限定され、お互いのことをもっとよく知りたいという気持ちを抱きながら学校生活を送っているように感じられた。そのような状況下で、

筆者が定期的に行ったグループワークは、生徒たちにとって交流を深めるうえで楽しく意義深い活動だったようで、多くの生徒が意欲的に取り組んでいた。そして、グループワークの回を重ねるごとに、生徒たちはお互いのよさを認め合い、「協働作用」の意味を実感していった。

また、生徒たちが書いたグループワークの振り返りシートには、毎回、活動を通じて感じたことや考えたことが丁寧に書かれていた。このことから、毎回のグループワークでの体験が生徒にとって重要であったと感じる。

課題は、「グループワークの形態の工夫」と「支援者としての在り方」の2点である。活動では、配慮が必要な特性のある生徒がワークにとまどっていた場面も見受けられた。今後は、事前の指導や活動中のサポートをさらに工夫することや、場合によれば通常学級と特別支援学級の2つの場で別々にグループワークを実施することも検討する必要がある。ただし、その場合は、生徒同士の心の距離感が離れてしまわないように留意する必要がある。

「支援者としての在り方」については、ゼミの指導教官から、「グループワークは、活動を通じて生徒が自分たちの力で与えられた課題を解決していくことが重要であり、支援者は介入しすぎたり、喋り過ぎたりしてはいけない。」という助言を受けた。しかし、実際には、生徒が困っている状況を見ると、ついつい励ましたりヒントを与えたりしてしまったことがあった。今後、筆者自身の「見守る」「待つ」姿勢をさらに深めていくことも課題である。

以上、今回の実践研究で得た、「多角的・多面的な生徒理解」「生徒の主体性尊重」「教職員の連携」についての気づきを、今後の教師生活で活かしていきたい。